

から仕入れたネガティブ情報を披露し、子どもを学校へ行かせるのに何の利もないことを訴えた。

私の不安を一通り吐き出させると、夫は、「よしんばKさんが言う通りの社会だとして、預けられて育った子どもが、皆不幸な人生を送ると言える？」と問いながら、「それに言葉もまだ分からないからこそ、1日も早くこの社会に慣れさせるためにも、学校へ行かせなくちゃと思わない？」と、さっそく私を納得させるために理論攻めで来た。「それに、その幼稚園は、Co-operative Toddler School（18ヶ月から4才までの子どもを預かっていた）という、当然、おしめをした赤ちゃんも預かるから、母親が週に数時間働く規則になっているらしいよ。子どもだけでなく、あなた自身がアメリカ社会に慣れるためにも、一石二鳥でしょう？」と、真剣に説得しはじめた。言葉のハンディに対する不安の上に、理屈だけでは子どもを人に任せるなどと到底考えられない「私に、どうしろと言うのかしら？」。まだ結婚して間もない頃だったので、相手の選択を誤ったかとさえ思えた。

話し合いは平行線で、結局、3人で学校を見学してみて決めようと夫が提案し、内心いやいやそれに付き合った。学校の内装は日本のそれとはおおよそかけ離れていて、第一印象は「何と雑然とした！」だった。だが、娘はというと、トコトコと近くにあったテーブルに、勝手知ったる態度で座ってしまった。口出しせずにじっと観察していると、隣の男の子からももらった粘土を、見よう見まねでこね出した。「お母さん、できた！」と嬉しそうにお皿（娘が言ったのではなく、私が勝手に想像した形）を見せたのだ。これが、長女がアメリカで初めて覚えた遊びであり、後に成人するまでいそしませたPlay Doughという遊びだった。長女にとってまさに、アメリカでの「はじめの一歩」となった。

まだ言葉も理解できない長女が、夫の言うように、「子どもは子どもの社会に入れてやると、勝手に遊ぶ」と、図らずも証明して見せたのだ。一方、私自身とは言えば、子どもを預けるに足る先生かどうか、じっと様子を見ていた。すると、ぐずっている3才くらいの子どもの話をじっくり聞いてやり（小さい子どもは何を言っているのか、親でも分からない事がある）、それに対してやさしく手を取り、自分のテーブルへ着かせて、遊びの手順を丁寧に何度でも説明していた。どうやら、うまく遊ばずにぐずっていたらしい。子どもとい

えども、きちんと話し相手になってくれるという先生の対応が、「この先生なら大丈夫そうだ」と感じられた。

手伝いをしている母親たちからも話を聞き、決して難しい仕事内容ではなく、私でも出来そうだと思えた。日本の幼稚園とは随分違って、子ども達はどこへでもふらふら歩き回っていて、お行儀がいい訳ではなかったが、何と云っても皆楽しそうに遊んでいる雰囲気が気に入った。また、すべて先生に任せるのではなく、自分の目で子どもの様子を見ることも出来ることから、不安も解消されそうだった。結局、私自身が納得して、まだおしめも取れていない、赤ちゃんのような長女を学校へ行かせることになった。

私をもっとも感謝したのは、言葉のハンディについてだ。留学生を多くかかえた大学だったため、母親達の中に、海外生活真っ只中という人が多く、皆誠意を持って接してくれた。一人取り残されることもない環境の中で、つたない英語を駆使して意思疎通に励んだ。実は、この幼稚園に娘と共に通ったことで、私自身が子ども以上にさまざまな事を体験し、いち早くアメリカ社会へ溶け込ませる結果となった。

このトドラー・スクールの一件以来、アメリカでの子育てについて、夫はいろいろアイディアを出すようになった。母と子のために、アメリカの社会へ一歩先んじて踏み出した、一家の主としての責任を全うしているのだと理解し、感謝している。

## 松本康子

まつもとやすこ

1979年、夫の留学で、1歳半の長女を帯同し渡米。その後、アメリカで次女、三女を出産。専業主婦として子育てと教育を担当。子ども達は、親から見てうらやましいバイリンガル・バイカルチャーの大人となった。このコラムでは、「アメリカで日本人の子どもをバイリンガルに育てた」私と子どもの悪戦苦闘の姿を紹介。

### 編集長から一言

子どもにとっても、母親である自分自身にとっても、アメリカ社会への「はじめの一歩」となった体験を康子さんに語っていただきました。

日本を出る前はバラ色に見えたアメリカの主婦の生活と子育ての現実が、実は大変なのだと言われた時の康子さんの驚き（後悔？）は想像を超えます。しかし、そのためらい・悩みも、お子さんが始めた粘土遊びで吹き飛びました。まさに、子どもから親が学んだのです。

前号で紹介した康子さんの言葉、「海外での子育ては、子どもだけではなく母親・父親も育て、初めて可能になる」という思いを抱いた「はじめの一歩」でした。